第七章　モナコ・マルセイユ

一　モナコ駅のつづき

次の手を考えた。モナコが無理なら、少し先のニースまで行って部屋を捜してみよう。深夜近くなってきたがニースに向かった。ニースの中央駅（ニース・ヴィル駅）で降りるべきところを、間違って一つ手前の駅（ニース・リキエ駅）で降りてしまったようだ。アナウンスが「ニース」と聞こえたように思えたので慌ててそこで降りたのだ。寂しそうな駅で人影がほとんどなかった――しまった。降りる駅を間違えた。

バスが止まっていたので運転手に尋ねてみると、そのバスはニース中央駅付近まで行くバスで、中央駅付近にはホテルがあると言っているようである。深夜近くになっていたが、バスに乗り中央駅に向かった。中央駅に着くと、運転手がホテルのありそうな方向を教えてくれた。しばらく歩くと、ホテルのサインが見えてきた。

深夜だったが、そのホテルで尋ねると泊めてくれるとのこと――オウ・マイ・ゴッド。そしてゆっくり休めた（二泊したホテルは一泊１５００円程度だった）。

二　モナコに引き返して

翌日、モナコに引き返し、まずは「モナコ海洋博物館」を訪ねた。この海洋博物館の館長は、ジャック＝イヴ・クストー

氏[1]で、テレビ番組『クストーの海底世界』を見ていた私のあこがれの人物の一人であった。彼の海での仕事振りを観ていてとにかく理想の人物と思っていた。水族館や海洋考古学に関する展示物を見学した。

テラスに出ると、偶然にもなんと「クストー氏」と思われる方が、何人かのメンバーと話をしながらお茶を飲まれている姿を見つけた。失礼だが、そっと写真に収めさせていただいた。海のそばで育ち、海が好きで、海に係る仕事に就くことが中高生からの夢であった。その延長線上で大学は水産関係を希望していたが、就職のことも考えて土木系――海の仕事に関係ありそうと思われた水工土木――を選んだ。結局、海関係の仕事には就けなかったが、波乗り遊びは今も続けている。

モナコ

クストー氏（海洋博物館にて、右端）

1　水中考古学の先駆者。調査船カリプソ号で海や海洋生物の研究を行う一方、書籍の出版や記録映画の放映により一般市民への啓蒙活動も行った。日本では、１９７０年代から１９８０年代にかけてのテレビドキュメンタリー番組『驚異の世界・ノンフィクションアワー』（日本テレビ系列）で放送された、自身も出演する『クストーの海底世界』シリーズで知られる。『フリー百科事典　ウィキペディア日本語版』。２０２２年１月28日（金）04：17ＵＴＣ　URL.https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャック＝イヴ・クストー

次にカジノに向かった。

ラフな服装ではあったが、カジノの玄関は通過させてくれた。スロットマシンを通り過ぎ、ルーレットの会場を覗いたが、言葉は一切聞き取れないし、雰囲気にも参加できそうな気配はまったく感じられなかった。ただし、スロットマシンなら簡単である。初めてのカジノ経験[2]として、スロットマシンに挑戦した。少しは勝つ瞬間もあったが、あっという間に手元のお金はなくなった。

三　マルセイユ

マルセイユは、この旅の大きな目的地のアルジェリア訪問の基地であった。もちろん、街としても十分楽しめる場所であった。まず、宿泊場所に落ち着いたが、この宿は、マルセイユの旧港に面した位置にあり、歩きまわるのに最適であった。宿は古い建物で、エレベータは鉄製でかごの上下が鉄の柵から透けて見えるしろものであった。日本では中々お目にかかれない旧式なものであったことが思い出される。

2　カジノ経験としては、その後、新婚旅行時のマカオでの「大小」、ソウルでの「スロット」、プサンでの「ルーレット」、済州島での「ルーレット」の経験があるが、マカオで少し勝てた記憶以外は全敗。

マルセイユ

宿を出て、まずは中央郵便局を目指した。そこに、絵はがきを送っていた女友達からの返事が来ているはずだった。半信半疑であったが、訪ねるとちゃんと返事が来ていて感激した。次に、丘の上に有る「ノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド寺院」を目指した。丘を登るとこの場所からは、旧港のある辺りのマルセイユの古い市街部がよく見えた。なかなかの眺望である。また、観光客が多くはなく寺院内の喫茶室でくつろげた。

マルセイユの旧港

マルセイユの旧港

丘を下り、旧港近くをブラブラした。魚を売っている屋台や魚釣り[3]をしている風景があり、私にはなじみやすい情景であった。食事は、有名なブイヤベースなどを旧港に面したレストランで食べた。ブイヤベースは特段に美味しかったとの記憶はないが、生ガキの一皿（五～六個入り、４００円程度）やイワシのフライ（５００円程度）はとても美味しかった。

ノートルダム・ドゥ・ラ・ガルド寺院

寺院の中で

旧港の屋台

3　生まれた家の前に汽水の池があり小さい頃からよく釣りをしていた。そのこともあるのか、釣りに関する文学も若い頃はよく読んだ。開口健氏の『フィッシュ・オン』やヘミングウェイの『大きな二つの心臓の川』が特に好きだった。この旅では釣りはできなかったが、家族とのニュージーランド旅行ではクイーンズタウンの湖でマスを釣った。釣ったマスを中華料理店に持ち込み調理してもらった。美味しかった。なお、この時、13歳の息子は家族を代表して初めてバンジージャンプをした。一皮むけた感じとなり子供から少年になったようだった。私は怖くてできなかった。

四　イフ島（岩窟王の舞台）見学

子供の頃に読んだ『巌窟王』（正式名は『モンテ・クリスト伯』）の小説の舞台のイフ島は、旧港から船で二十分ほどの沖合に浮かぶ小さな島である。小説のイメージで、絶海の孤島と想像していたが、船に乗ると直ぐついた。また、断崖絶壁のイメージもあったが、それほど険しい断崖はなかった。上陸もでき、他の観光客とともに牢獄跡などを見て回った。教科書や本で有名な場所を数々回ったが、このイフ島のみが唯一、期待外れと言える場所であった。[4] 本で読み想像するほうが良かった。

イフ島

イフ島の牢獄

4　子供の頃に読んだ冒険小説としては、『巌窟王』の他、コナン・ドイルの『失われた世界』が思い出される。ジャングルでの焚火の時、恐竜に襲われるが、主人公が火の付いた大きな枝で撃退するシーンが印象的。こちらのモデルは、南米のギアナ高地とのこと。こっちには行けないだろう。

五　アルルとアルジェリアのビザ

ゴッホの『アルルの跳ね橋』で有名なアルルが、マルセイユから西に３０㎞の位置にある。マルセイユから日帰りでアルルに向かった。跳ね橋を目指したが、どうしても分からない。ただし、アルルの街中で地元のオジサン達が「ボーリング原型みたいなゲーム」をしているところやローマ時代の遺跡を見物できた。また、フランスの大河の一つローヌ川の流れを確認した。ドナウ川と比較すると小さな川かもしれないが、私には十分に大きな川で豊かな流れであった。

アルルでのおじさん達の遊び

ローヌ川

アルジェリアに入国するには、ヨーロッパ諸国と異なり入国ビザが必要である。地図でアルジェリア領事館を捜し訪問した。領事館の職員は、目鼻立ちがすっきりしており対応も的確で、『千夜一夜物語』の王族のイメージが浮かんだ。何とかビザを取得することができ、アルジェリア訪問の第一関門が突破できた。地中海をアルジェへと渡る船は、新港から出ているようだ。新港は、旧港の北にあり、波止場はそう遠くはなかった（往復約３万円のチケットを購入した）。

予定通り、大きな荷物は宿が預かってくれるとのことで荷物を減らしてアルジェへ向かうこととした。